



木下春（1892-1973）《桃》 20世紀

木下春の画業と《桃》について

はじめに

当館では2021年、持丸和久家より日本画家・木下春（1892-1973）⁽¹⁾ および春が師事した前田青邨（1885-1977）の作品を計4点、ご寄贈頂いた。これら寄贈作品となる春《桃》（20世紀、絹本着色、122.8×29.6cm）（図版I）、青邨《鍾馗》（20世紀、紙本墨画、129.3×32.5cm）・《扇面売》（20世紀、紙本墨画淡彩、33.5×42.8cm）・《かちかち山》（1927年、紙本墨画、23.7×31.6cm）については、先に開催した2023年度「第6回新収蔵品展」（2023年5月20日～6月11日）において公開をし、作家の略歴も含めた解説リーフレットを発行している⁽²⁾。また、春の画業についてはすでに『日本美術院百年史』5巻の「作家略歴」⁽³⁾、吉村有子氏による「福島的美術家たち②4木下春」⁽⁴⁾にまとめられている。本稿ではこれらを参照しつつ、春が参加した俳誌『若葉』⁽⁵⁾の記事も読みながら、改めて青邨門下で戦前から戦後まで日本美術院を中心に作品を発表し、また俳壇においても活躍をした木下春について、画業を中心に確認をする。同時に《桃》についても、その表現と制作年代について検討を試みたい。

なお、本稿の最後に「木下春 略年譜」を付したので、適宜ご参照をされたい。

1. 生涯について

木下春の名を画家名鑑や美術年鑑の類でひもとくと、住所がしばしば変更されており、春自身が「転々と居を変えるのは好きこのんでではない余儀ない破目」と述べているように⁽⁶⁾、一か所に長らく住まうことが少なかったことが確認できる。また、春は俳句雑誌にたびたびカットと随筆を寄せているが、そこでも仮住まいについて述べることもあり、本人の中でも折に触れ取り上げたテーマであった⁽⁷⁾。本章では、私生活については不明な点が多い春の生涯について、その転居を中心に概観したい。

春は明治25（1892）年、福島県福島市置賜町十四番地にて木下銀助、なか子の長女として生まれた⁽⁸⁾。長女・春のあと12人の子が産まれたので、春は13人兄弟の第一子となる⁽⁹⁾。父・銀助は味噌醤油などを扱う高田屋商店を営んでおり、また、福島商業会議所議員や福島市議員を務めるなど福島市の有力者であった。春は福島県立福島高等女学校を卒業後、家業を手伝いながら⁽¹⁰⁾ 短歌雑誌『アララギ』の会員として同誌へ投稿も行っており、いくつかの短歌が入選、『アララギ』に掲載されている⁽¹¹⁾。その後、肺病を患い神奈川の平塚にあった杏雲堂平塚病院へ入院、病院付属の貸別荘で一人住まいをする⁽¹²⁾。ここで、同じく療養中であった通信管理局事務官の富安風生（1885-1979）と交流をしている⁽¹³⁾。風生は、のちに春の俳句の師となる人物である。ただし、療養中の風生は「俳句や短歌とも遠ざか」っており、春との交流については、春が「毎日僕の別荘に遊びに来ては、面白おかしい世間話をして、賑やかなことの好きな母を喜ばせた」と述べているように、この頃はまだ俳句を通じた交流があったわけではなかったようだ⁽¹⁴⁾。春は療養ののち大正8（1919）年6月、絵を学ぶために上京、当時、東神奈川に住んでいた前田青邨に師事し寄寓をする⁽¹⁵⁾。春は絵の道を選んだことについて、「胸を病んでの海岸生活に青春期を絶望の中に過していた、おもひがけなく病気が快復してもおく病になり切った心に世の人並の生活に入らずに画業に志した」⁽¹⁶⁾と回想をしており、肺を患ったことがきっかけとなったことが確認できる。また、吉村有子氏は、春が平塚での療養中に青邨と近づきになり「青邨から話を聞いたり、作品を見せてもらっているうちに、絵画への興味が芽生えた」と紹介をしている⁽¹⁷⁾。なお、春が青邨宅へ寄寓したことについては、青邨の妻すゑ（1892-1993）と懇意だったためといわれている⁽¹⁸⁾。春と同じ歳であったすゑは、長唄から派生した萩江節を修めた人物でもあり（1956年には萩江節五世露友を襲名）、春もまた、上京してから長唄を杵屋小四郎に学んでいた⁽¹⁹⁾。後年、すゑは春の詞で小曲も制作しているが⁽²⁰⁾、春による青邨との師弟関係については、その背景にすゑとの交流があったことも指摘できるだろう。そして、青邨宅への寄寓ののち、東京の千駄ヶ谷に移り住んだ⁽²¹⁾。

春は、青邨門下となってもない大正9（1920）年、再興第7回日本美術院展覧会（以下、院展）に《秋草》を出品する。初出品の同作が初入選となったため、新聞では「入選の喜び―昨夜自庭の木下春子女史」⁽²²⁾や「院展日本画に入選の木下はる女」⁽²³⁾の題で本人の写真が掲載されるなど、注目を集めた⁽²⁴⁾。翌大正10（1921）年6月、千駄ヶ谷から上目黒の駒沢練兵場付近へ引っ越し、同じく青邨門下となった青木しづ子と同居生活を始める⁽²⁵⁾。大正15（1926）年には麴町に居を移し⁽²⁶⁾、昭和2（1927）年頃、青邨が住んでいた横浜・鶴見に移り住む。春の鶴見での住所は当初、「横浜市鶴見東寺尾町二〇八一」⁽²⁷⁾であり、昭和6（1931）年には「横浜市鶴見区東寺尾町八七六」となる⁽²⁸⁾。いずれも青邨の住所である「横浜市鶴見区生麦一四四四」⁽²⁹⁾とは徒歩で往復できる距離であった⁽³⁰⁾。以降、終戦前まで、春は青邨宅と徒歩で往来できる距離に住まうこととなる。

春は鶴見に10年ほど住んだが、昭和13（1938）年、住まいが国道建設の工事地域にかかりそうになり⁽³¹⁾、また、青邨が北鎌倉にアトリエを建設中で移転を予定していたこともあって、師よりも早く昭和13（1938）年、北鎌倉へ転居をする。この時の最初の住まいについては「神奈川県大船町山ノ内白山神社下」⁽³²⁾や「神奈川県大船町山ノ内九四七」⁽³³⁾とあるが、戦中に同地の東慶寺へと転居するまでは「崖下」の家⁽³⁴⁾と回想していることから、同じ住まいであったと考えられる⁽³⁵⁾。なお、翌昭和14（1939）年には青邨も大船町山ノ内487のアトリエの竣工を受け、転居をした。春は北鎌倉に住んでから、富安風生に師事して俳句を始め⁽³⁶⁾、また昭和15（1940）年には朝鮮半島へ旅行もしている。3年ほどたったのち、同じく山ノ内地区にある東慶寺境内の、茶室構えの離れに転居をする⁽³⁷⁾。東慶寺の離れでは、制作の傍ら、風生門下の加倉井秋をとともに春秋会⁽³⁸⁾などの句会も催しており、こうした句会には高浜虚子も参加していた⁽³⁹⁾。日本画家として制作に励みながら、俳人としても精力的に活動し始めたのが、東慶寺の離れに移り住んでからのことといえるだろう。終戦前後の春の住まいについては不詳であるものの、一時期は郷里の福島市に疎開をしていたことが確認できる⁽⁴⁰⁾。ただし、生まれ育った住まいは強制建物疎開で失われていたため、両親の移住先となった「梨園内の一つ家」への帰省であった⁽⁴¹⁾。戦後まもない昭和21（1946）年12月には、東慶寺にてホトトギス六百号記念俳句会が行われる。この準備に春は協力、参加をしているため⁽⁴²⁾、この時には福島から鎌倉へと戻っていたと考えられる。また、東慶寺の住まいはすでに人が住んでいたため、小町通りの友人宅、次いで二階堂地区の村山宅へと身を寄せた⁽⁴³⁾。これら春が間借りした家の人物については不明である。以降、鎌倉駅周辺を転々とする事となる。

昭和25（1950）年、長谷一丁目にあった作家・吉屋信子（1896-1973）の住まいに移る。これは吉屋が長谷から東京へと拠点をうつした際、春に自邸に住むよう声をかけたためと考えられる⁽⁴⁴⁾。昭和31（1956）年には二階堂地区にあった神津方に転居したようだ⁽⁴⁵⁾。ここには、鉱物学者の神津俣祐が住んでいたが本人は昭和30（1955）年に没しており、妻の千代が住んでいた⁽⁴⁶⁾。千代は観世流の太鼓を修めた人物であり、春が身を寄せた背景には、古典芸能を通じた交流があったのかもしれない。しばらく神津宅に滞在したのち、昭和35（1950）年ころ、鎌倉市大町1174（現：大町1丁目9）に転居し、昭和44（1969）年に福島の弟夫婦のもとへ身を寄せるまでは、同地を拠点として制作を行っていたと考えられる。

2. 画業について

春が師事した前田青邨は、梶田半古門下であり歴史画をよくした画家である。ただし、春自身の画業を見ると、その多くは花鳥画であった。また、大作に取り組み発表を続けた日本美術院展への出品作では、昭和期になると花鳥画とともに大画面の人物画も展開するようになった。この背景には、青邨宅のそばへ移住したこともあったように思われる。本章では春の画業を、東京に移住した①初期（大正8年～15年）、横浜市鶴見に住んだ②中期（昭和2年～13年）、鎌倉に住んだ③後期（昭和14年～41年）の3つに分けて、院展出品作を中心に概観したい⁽⁴⁷⁾。

①初期（大正8年～15年）

大正8（1919）年、春は画業を志して上京し、青邨に師事をする。そして1章でも述べたように、初の挑戦となる第7回院展に《秋草》（1920年、二曲一隻）（挿図1）を出品し入選を果たした。同作は、東神奈川の青邨宅の庭に取材したもので、制作のために「一週間程は毎日千駄ヶ谷の寓居から通」ったという⁽⁴⁸⁾。《秋草》はススキやハギなどの草が密集して生い茂る様子を画面奥から手前まで緻密に描いた作品で、よく観察をして表した様子がうかがえる。翌年《桃》（1921年）（挿図2）も、自宅裏の桃の木に取材したもので⁽⁴⁹⁾、画面いっぱい桃の木の葉が生い茂っている様子を緻密に描いた作品であった。春はこの時「院友」⁽⁵⁰⁾に推挙されている。これら二つの作品には、綿密な取材、入念に写生を行い、自然に忠実に表現した様子がうかがえる。青邨が春にどのような指導を行ったかは不明であるが、同じく青邨門下で、書生として修業を始めた守屋多々志（1912-2003）は、初日に青邨から「日本画の基本はまず写生と古典（絵巻物）の勉強である。これがしっかり勉強できていないと本当の絵は描けない」と伝えられ、毎日、書生部屋で写生と模写を勉強した、と述べている⁽⁵¹⁾。春が描いた《秋草》《桃》は、ある種、青邨の教えにも忠実に描かれた作品であったといえるだろう。ただ、初出品してわずか2年で「院友」に推挙された重圧や、関東大震災の影響もあったのだろうか、3度目の入選は昭和4（1929）年まで待たねばならず、しばらくは画業が不振だったことがうかがえる。

②中期（昭和2年～13年）

東京を転々としたのち遅くとも昭和2（1927）年までに、春は青邨宅の近所となる横浜市鶴見へと移転する。そして、昭和4（1929）年、再興第16回院展《秋苑》（1929年、六曲一隻）（挿図3）で再び入選を果たした。同作は、六曲一隻の画面に、花をつけたフヨウ、ハギ、ススキなどを緻密な筆で描いた作品である。《秋苑》も身近な草花に取材したと考えられ、主題や描法においては、初期の出品作に連なるものだといえるだろう。ただし、初期の作品が、おそらくは写生の時期による問題だと思われるが、花実をほとんど描かずに主に葉が茂る様子を近接した構図で表しているのに対し、《秋苑》はフヨウやハギ、ワレモコウなどに花が咲いており、これらを六曲一隻に配置した点においても、前作よりも華やかで複雑な構図に取り組んだものとなっている。翌昭和5（1930）年以降は、《砧》（1931年、二曲一隻）、《花買》（1932年、二曲一隻）、《土用ぼし》（1933年、二曲一雙）（挿図4）、《機織》（1934年、紙本着色、二曲一隻、福島県立美術館）、糸紡ぎに取材した《こやすみ》（1938年、二曲一隻）など、古くより主に女性が担い手となった労働を主題として、画業を展開していく。中でも《土用ぼし》は鐙木清方から絶賛され、右隻は「色も形も、柄も、昭和の衣装屏風として相当な価値を持つ」⁽⁵²⁾と評されている。清方は同時に「組み立てのうまさ、桃山好みの洗練、それに伴う色彩効果、だが実はそれは師たる前田青邨のゆづりもので、木下女史はいかにも素直にそれを継承して、女性らしくその好みを土用ぼしに託して表現したので、それだけでも悪いとはいはないが、悪いどころかこの絵は今度の会の中でも有数ないいものなのだが、先生の好みに即し過ぎることは、多少の戒心を要する」⁽⁵³⁾と述べ、《土用ぼし》の画面に青邨の指導が色濃く見て取れることを指摘した。

ちょうどこの頃、雑誌『塔影』の「古今閨秀画人特輯」において、青邨は春について次のように述べている。

「木下は一体私の弟子といふよりは、今では私の家の家族の一人だと云つた方がいゝ位ひである。絵のことはかきではなく、始終私の家に入出入りして、弟子の世話もするし、子供の面倒も見てくれる、娘が嫁に行く時も全く親身になつて色々世話をしてくれるといった具合で、私も実は木下を弟子のやうには考へてゐないのである。（略）始めは慰み半分に私の所へ来てゐたのであるが、それからずつと本気にやるやうになり、私の家の近所に住つてこつ／＼と研究し続けてゐるやうなわけである（略）」⁽⁵⁴⁾

青邨のことばからは、春が青邨と家族同様の交流をし、家事も手伝いながら修行を続けていた様子をうかがうことができる。また、春の画面が大きく変化したのも、青邨宅のそばで修行を行うようになってからのことだといえるだろう。

③後期（昭和14年～41年）

春は、青邨の移転計画を機に昭和13（1938）年、鶴見から北鎌倉へと転居する。昭和15（1940）年は春先から初夏にかけて北朝鮮を旅行し、同年、チマチョゴリ姿の女性を描いた《春愁》（1940年）（挿図5）を再興第27回院展に出品した。続けて、髪を整える巴御前を描いた《巴》（1941年、六曲半双）（挿図6）、東慶寺を開創した覚山尼と泣き伏すような姿勢をとる女性を描いた《覚山尼》（1942年、二曲一双）、平安時代の安産祈願の風習を描いた《もちかゆの日（枕の草紙）》（1943年）を発表した。《覚山尼》の主題は移住先となった東慶寺に取材したものと考えられるが、巴御前や安産祈願といった主題からは、時局をふまえながら、女性を主題とした歴史画に取り組んだ姿勢を見てとることができよう。これらの歴史画はいずれも無鑑査に選ばれた。

昭和20（1945）年に終戦を迎えると、翌昭和21（1946）年には中村汀女を描いた《静思》（1946年）⁽⁵⁵⁾、次いで《天秀尼》（1947年、紙本着色、二曲一隻、個人蔵）、俳句仲間の女性をモデルとした《婦女》（1949年）⁽⁵⁶⁾、梨園で作業をする女性たちを描いた《故郷の春》（1950年、紙本着色、福島県教育委員会）などを発表した。女性像に取材した点は終戦前から連なるものだが、同時代の女性を取り上げた点は、大きく異なるといえるだろう。その後、温泉で湯に打たれる女性に取材した《湯滝》（1959年、白布温泉中屋別館不動閣）や《海女》（1961年）など、体つきそのものにも注目し表現を試みている。さらに、鎌倉の遺跡に取材した《十六の井》（1953年）や、《甲子温泉の秋》（1958年）、《峨々の暮色》（1960年）、《梅の谷戸》（1968年）といった、緻密で濃彩の風景画の大作にも取り組んでおり、新境地を切り開いていった。

3. 木下春《桃》について

最後に、木下春《桃》（20世紀、絹本着色、122.8×29.6cm、実践女子大学香雪記念資料館）について来歴および表現と制作年代について確認をする。

木下春《桃》、そして青邨の作品が伝わった持丸家は、代々、鶴見の東寺尾の地主であった。とくに持丸兵輔（1843-1923）は、生見尾村（現在の鶴見区南部）の初代村長を長く務めた人物で、小学校新築や増築に寄付を行うなど教育事業に尽力、また漁業権確保や農業の奨励を行い地域の産業も盛んにするなど、鶴見地域の名望家でもあったとされる⁽⁵⁷⁾。青邨は大正5（1916）年より鶴見に住まうが、その家も持丸家から借りたものであったという⁽⁵⁸⁾。先に述べたように、春も昭和2（1927）年頃、青邨の側に住むように鶴見に転居するが、その住所は東寺尾であり持丸家の地所であったと考えられる。また、青邨自身が持丸家を訪れていた様子も確認でき⁽⁵⁹⁾、持丸家と青邨、春らが交流していたことがうかがえる。持丸家に伝わった春の作品も、そうした交流の中で直接、画家より贈られたものと考えられるだろう。

次に、《桃》の表現について見てみたい。《桃》は縦長の画面に花が咲きほころぶ桃の枝を描いた作品である。画面左下には墨書で「波留」と朱文長方印「波留」とあり、同作が収められていた箱には、蓋表に「桃」の墨書、蓋裏に「木下波留作」の墨書と画面と同じ朱文長方印「波留」の押印がある。勢いよく上方へと伸びる桃の枝に近接した構図であるが、枝や萼、花の色の違いから、二種の桃が描かれていることがわかる。画面向かって右に配された桃は、枝や萼には赤身を帯びた茶色が施され、花びらは極淡い薄紅色で表現されている。これら淡い薄紅色の桃が一番手前の枝となり、この奥に、枝をやや黄味がかかった茶色や淡い黄緑色で描き、花びらを白色で表した桃が配される。いずれの色の桃も、枝は手前を濃く奥を薄く塗り分けており、枝同士の前後関係を表している。また、枝そのものも筆勢にまかせて線を引いたのではなく、細い枝や節に濃淡の調子や異なる色を施すことで立体感も表している。花は薄く溶いた胡粉を基調として花卉を描いており、淡い黄色と緑色で細かく蕊を描いている。枝全体に蕾と芽吹いた若い葉も配しており、葉には細い筆によって葉脈を描きこんでいる。花の向きも真上や横など、さまざまな角度で表しており、全体的に綿密な写生に基づいて、精緻で細やかな表現が見られる画面となっている。守屋多々志が青邨から「写生」の重要性を説かれたように、《桃》にも、そうした青邨の教えを見て取ることができるだろう。

以上、持丸家への伝来、および丁寧な観察に基づいたと考えられる素直な自然描写の表現をふまえると、

《桃》の制作年代は昭和2（1927）年から昭和13（1938）年の間であり、その中でも初期の画業に近い時期にあたると考えられるのではないだろうか。また、《桃》に用いられた「波留」の署名と印がある落款（挿図7）についても、ある特定の時期に用いられたと考えられる。「波留」と刻まれた印章は、奈良・当麻寺の天井絵《粟》（1936年）（挿図8）および小島一谿との松坂屋における展覧会出品《芍薬》（1939年）（挿図9）、青巒会出品《壺の花》（1942年）に見られる。ただし、ここに添えられた署名は「春」である。また、院展出品《機織》（1934年、福島県立美術館）は署名がなく「春」の印があるのみである。昭和9（1934）年以降の落款に「春」が散見できることから、「波留」の署名を用いた《桃》の制作年は、昭和2（1927）年から昭和9（1934）年の間と推定できるのではないだろうか。

まとめ

昭和43（1968）年に院展に出品した後の主な画業については不明である。ただし、体調も崩しがちであったと思われる。昭和43（1968）年、『木下春句集』が刊行されるが、春より選句と解説を依頼された加倉井秋をは追悼文にて、句集刊行を決めた時はすでに死に対する心の用意が整っていたと指摘している⁽⁶⁰⁾。春は刊行後に体調を崩し、昭和44（1969）年以降、病を機に郷里の弟夫妻の元に身を寄せ、昭和48（1973）年に逝去した⁽⁶¹⁾。晩年、春の身の回りの世話をした弟の妻・木下保子によれば、春は病床ではしばしば、時間をかけて赤富士の色紙を描いていたという⁽⁶²⁾。また、保子自身も俳句を嗜み、俳誌『若葉』に参加をした人物であった。

本稿では、春の画業を中心に概観をしたが、あらためて春の生涯を見てみると、そこに俳句や長唄などを通じた交流が横たわっていることに気づく。春の俳句の師で、晩年は春から絵の手ほどきを受けた富安風生は、春について「写生風の繊細で温雅な画風は、そのまま余技の俳句の風格でもあったようだ（中略）人柄は明るく、少しおしゃべりが過ぎたがシンはしっかりして」おり、世話好きで結社の皆から慕われていた、と述べている⁽⁶³⁾。他方、春自身は本職となる絵の修行についてあまり言葉を残していないものの、晩年に、画の道に進んだことについて「三十余年、にがさ、きびしさ、苦しさに堪へて一人の生活のまゝ老境に入」⁽⁶⁴⁾ ったと語っている。春は随筆でしばしば家というものに縁のない独り身について触れているが、故郷より一人上京して画の道を進むなか、画壇とは別の、古典芸能を通じた交流が春の支えとなっていたことは想像に難くない。春の画業が、とりわけ鎌倉への移住以降にますます盛んとなり新境地を切り開いていくようになるのも、風生への師事を始めた時期と重なるのは偶然ではないのではないだろうか。

春の院展出品作を始めとした作品には所在不明のものが多く、青邨門下として活躍をした春の画業については、今後も継続して調査をしていきたい。

（実践女子大学香雪記念資料館 学芸員 三國 博子）

謝辞

作品をご寄贈下さいました持丸和久様、持丸家について情報をご提供下さいました塩谷純様、木下春についてご教示を下さいました秋山光文先生、増渕鏡子様、月本寿彦様、吉村有子様、渡邊彰範様、山中湖情報創造館様に深く感謝申し上げます。

また、増渕鏡子様より福島県立美術館が所蔵する木下春調査資料の閲覧及び借用のご厚意を得ました。重ねて御礼申し上げます。

図版典拠

図版Ⅰ：実践女子大学香雪記念資料館所蔵画像

挿図1：木村武山編『日本美術院第七回展覧会図録』西東書房、1920年（国立国会図書館デジタルコレクション：

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1183601/1/46?keyword=%E7%A7%8B>（2024年11月15日閲覧））

挿図2：日本美術院編『日本美術院第八回展覧会図録』精華社等、1921年（国立国会図書館デジタルコレクション：

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1183622/1/121>（2024年11月16日閲覧））

挿図3：日本美術院編『日本美術院第十六回展覧会図録』大塚巧芸社、1929年（国立国会図書館デジタルコレクション：

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1186160/1/93?keyword=%E7%A7%8B>（2024年11月15日閲覧））

挿図4：日本美術院編『日本美術院第二十回展覧会図録』大塚巧芸社、1933年（国立国会図書館デジタルコレクション：

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1186244/1/118?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B>（2024年11月15日閲覧））

挿図5：日本美術院編『日本美術院第二十七回展覧会図録』大塚巧芸社、1940年（国立国会図書館デジタルコレクション：

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1186316/1/51?keyword=%E6%98%A5>（2024年11月15日閲覧））

挿図6：日本美術院編『日本美術院第二十八回展覧会図録』大塚巧芸社、1941年（国立国会図書館デジタルコレクション：

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1184265/1/73>（2024年11月15日閲覧））

挿図7：実践女子大学香雪記念資料館所蔵画像

挿図8：『昭和の天井絵 当麻寺中之坊客殿』京都書院、1976年

挿図9：『塔影』15巻12号、塔影社、1939年12月（国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1897517/1/89?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B>（2024年11月15日閲覧））

註

- (1) 木下春の名前は、文献によって「はる」「春子」「はる子」の表記がある。
- (2) 「解説リーフレット」第6回新収蔵品展「実践女子大学香雪記念資料館、2023年5月20日。
- (3) 「作家略歴」『日本美術院百年史』5巻、日本美術院、1995年、791頁。
- (4) 吉村有子「福島美術家たち④木下春」『読売新聞』（地方版・福島）1996年4月14日朝刊、29面）。このほか村山鎮雄「福島の近代美術」（三好企画、1992年）にも略歴が紹介されている。
- (5) 『若葉』は、富安風生が選者となり1928年より刊行された俳誌。昭和23年に同人制が設けられると、春も同人となった。『若葉』については富安風生『若葉年刊句集（Ⅱ）』若葉社、1968年（国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/12507179/1/1?keyword=%E5%90%8C%E4%BA%BA>（2024年11月15日閲覧））を参照。
- (6) 木下春「春それぞれ」『若葉』25巻3号、若葉社、1952年3月、8頁-9頁。
- (7) 春が仮住まいについて触れた随筆に次のものがある。
木下春「秋晴」『俳句研究』7巻12号、1950年12月、34頁-35頁。
木下春「移り住みて」『若葉』24巻3号、若葉社、1951年3月、12頁。
木下春「春それぞれ」（前掲註6）。
木下春「初詣」『若葉』37巻1号、若葉社、1964年1月、52頁-53頁。
- (8) 木下銀助と春については次の文献を参照。
『話題の人々』福島通信社刊行部、1923年、9頁（国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/913390/1/13?keyword=%E7%A6%8F%E5%B3%B6%E3%80%80%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E9%8A%80%E5%8A%A9>（2024年11月15日閲覧））
『福島県人名鑑：一名事業と人物』（大正十二年）福島県人名鑑刊行会、1922年-1923年、キ4頁-5頁（国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/909402/1/29?keyword=%E9%8A%80%E5%8A%A9>（2024年11月15日閲覧））。
- (9) 木下春氏の甥にあたる渡邊彰範氏のご教示による。
- (10) 「絵を志して僅かに一ヶ年」『読売新聞』1920年8月28日朝刊、5面。
- (11) 春の短歌は『アララギ』10巻10号（国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/2334331/1/46?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E6%98%A5>（2024年11月15日閲覧））のほか、10巻11号、12号）、11巻（3号-5号）、12巻（4号、6号、11号）に「福島 木下春」として紹介されている。
- (12) 木下春の療養生活と富安風生の出会いについては次の文献を参照。
加倉井秋生、清崎敏郎『富安風生』（新訂俳句シリーズ・人と作品：9）桜楓社、1980年、53頁（国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/12500559/1/32?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B>（2024年11月15日閲覧））。
富安風生「木下春さんのこと」『若葉』46巻10号、若葉社、1973年10月、24頁-27頁。
- (13) 富安風生は本名謙次。昭和11年に通信次官となるも、翌12年に辞任し句作に励んだ。戦後は作句活動の傍ら昭和25年に電波監理委員長（昭和27年まで）、昭和45年にTV全国番組審議会委員長なども歴任し、昭和46年に日本芸術院賞を受賞した。風生の経歴については「年譜」（加倉井秋生、清崎敏郎『富安風生』（新訂俳句シリーズ・人と作品：9）前掲註12所載）を参照。
- (14) 富安風生「木下春さんのこと」（前掲註12）。
- (15) 「雑録」『美術公論』1巻5号、美術公論社、1920年9月、49頁（国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1491826/1/31>（2024年11月15日閲覧））。
前田青邨については京都国立近代美術館ほか編『前田青邨展』（日本経済新聞社、2001年）所収の木下悦子「年譜」（同図録176頁-194頁）を参照。
- (16) 木下春「随筆歳時記 虹」『俳句研究』13巻7号、角川マガジンズ、1956年7月、85頁。
- (17) 吉村有子（前掲註4）。
- (18) 「雑録」（前掲註15）。
- (19) 「絵を志して僅かに一ヶ年」（前掲註10）。

- (20) すゑは1956年に宗家五世荻江露友を襲名したのち、新曲として木下春作詞による小曲「かきつばた」「天の川」「七夕」「短夜」「秋雨」を作成した(町田佳声・仁村美津夫『荻江露友 宗家五世』邦楽と舞踊出版部、1968年(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/12432974/1/104?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E6%98%A5> (2024年11月15日閲覧))。
- (21) 「雑録」(前掲註15)。
- (22) 『朝日新聞』1920年8月28日朝刊、5面。同紙には、ほかに「一年の勉強で初入選の木下春子女史 描き初の「秋草」」の記事が掲載された。
- (23) 『東京日日新聞』1920年8月28日朝刊、7面。同紙には、ほかに「院展入選の二異彩 木下春子女史と中島武志少年」の記事が掲載された。
- (24) 春の初入選を報じたそのほかの新聞記事として次のものがある。
「院展に入選の人々 日本画五百廿点中入選十六点の中に紅一点木下春子さんの『秋草』」「絵を志して僅かに一ヶ年」(前掲註10)。
- (25) 「今年も入選を期して苦心の『桃』を完成した木下春子女史と同じ家で共に院展出品を製作の若い青木しづ子さん」『読売新聞』1921年8月23日朝刊、4面。
青木しづ子は第8回日本美術院試作展覧会(日本橋・三越、1922年3月20日～4月3日)に《草花》が入選となった「青木しづ」のことと思われる(『日本美術院百年史』5巻、日本美術院、1995年)。
- (26) 「現代美術家録」『日本美術年鑑 1927』朝日新聞社、1926年、13頁。
- (27) 「現代美術家録」『日本美術年鑑 1928』朝日新聞社、1927年、14頁。
- (28) 「美術家録」『美術新論』6巻12号、美術新論社、1931年12月、11頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1552997/1/95?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E6%98%A5> (2024年11月15日閲覧))。
- (29) 「現代美術家録」『日本美術年鑑 1928』(前掲註27)、33頁。青柳は大正5(1916)年に鶴見に転居をした。青柳については京都国立近代美術館ほか編『前田青柳展』(日本経済新聞社、2001年)所収の木下悦子「年譜」(同図録176頁-194頁)を参照。
- (30) 横浜市鶴見区編「鶴見区全図」『横浜市鶴見区勢概覧 昭和11年版』横浜市鶴見区、1936年(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1463804/1/129?keyword=%E5%85%A8%E5%9B%B3> (2024年11月15日閲覧))。
- (31) 木下春「春それぞれ」(前掲註6)。
- (32) 『帝国新書画名鑑 昭和十三年度』(2版)最高美術社、1938年、157頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1025777/1/47?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E6%98%A5> (2024年11月15日閲覧))。
- (33) 東京連合婦人会編「婦人録」『昭和十五年婦人年鑑』東京連合婦人会、1940年、406頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1463625/1/212?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E6%98%A5> (2024年11月15日閲覧))。
- (34) 木下春「春それぞれ」(前掲註6)。
- (35) 同地は白山大権現を祭る祠のある山の下に位置する。住所に示されている「白山神社」は白山大権現のことかと考えられる。
- (36) 木下春「春それぞれ」(前掲註6)。
- (37) 木下春「春それぞれ」(前掲註6)。
- (38) 加倉井秋を「木下春女史を悼む」『若葉』46巻10号、若葉社、1973年10月、28頁-29頁。
- (39) 木下春「春それぞれ」(前掲註6)。
- (40) 「玉藻」『ホトトギス』49巻4号、ホトトギス社、1946年4月、33頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/7972705/1/17?keyword=%E7%8E%89%E8%97%BB> (2024年11月15日閲覧))。
- (41) 木下春「三月のふるさと」『若葉』26巻3号、若葉社、1953年3月、30頁。
- (42) 山田雨雷「ホトトギス六百号記念鎌倉俳句会」『ホトトギス』50巻7号、ホトトギス社、1947年7月、6頁-7頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/7972720/1/4?keyword=%E5%8F%A5%E4%BC%9A> (2024年11月15日閲覧))。
- (43) 木下春「紅梅」『現代俳句五十人集』第1輯、白鷺書房、1947年、71頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1708746/1/40?keyword=%E6%98%A5> (2024年11月15日閲覧))。
- (44) 木下春「移り住みて」(前掲註7)。
- (45) 猪木卓爾編『現代日本画家辞典』日本美術新報社、1956年、192頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1707746/1/103?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E6%98%A5> (2024年11月15日閲覧))。
- (46) 神津千代については、次の文献を参照。
『会員氏名録 昭和二十八・二十九年用』学士会、1953年、208頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/9577295/1/111?keyword=%E7%A5%9E%E6%B4%A5> (2024年11月15日閲覧))。
高橋正幸「鉱物学者 神津俣祐先生」『信濃教育』1003号、信濃教育会、1970年6月、9頁-17頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/6070567/1/7> (2024年11月15日閲覧))。
- (47) 木下春の日本美術院出品作については、おもに日本美術院百年史編纂委員会編『日本美術院百年史』5巻～11巻(財団法人日本美術院、1989年～1997年)を参照。
- (48) 「一年の勉強で初入選の木下春子女史 描き初の「秋草」」(前掲註22)。
- (49) 「今年も入選を期して苦心の『桃』を完成した木下春子女史と同じ家で共に院展出品を製作の若い青木しづ子さん」(前掲註25)。
- (50) 再興日本美術院が設けている序列のひとつで、院展に二回以上の入選をし、同人によって推挙された者に与えられる(川路柳虹『現代日本美術界』中央美術社、1925年、95頁参照(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1017776/1/71?keyword=%E9%99%A2%E5%8F%8B> (2024年11月15日閲覧))。
- (51) 守屋多々志「青柳門下となる」(守屋多々志『日本画の写生』美術出版社、1977年、12頁-19頁)(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/12426820/1/9> (2024年11月15日閲覧))。
- (52) 籾木清方「院展の絵(一)」『東京日日新聞』1933年9月12日朝刊、8面。
- (53) 籾木清方「院展の絵(一)」(前掲註52)。
- (54) 前田青柳「木下春のこと」『塔影』12巻3号、1936年3月、48頁-49頁。
- (55) 春は《静想》について、「句三昧に入つて他念のない静かな姿」を汀女で表そうとしたと述べている(木下春「静想」『若葉』20巻1号、1947年、11頁)。
- (56) 《婦女》のモデルについては「はまなすの葉(二)」(『はまなす』5巻1号、1950年1月、46頁(国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/7963862/1/25?keyword=%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E6%98%A5> (2024年11月15日閲覧)))を参照。
- (57) 持丸兵輔については、塩谷純氏より次の情報をご教示頂いた。
松本洋幸「資料もやま話2 持丸兵輔とその資料」『開港のひろば 横浜開港資料館館報』第81号、2003年7月30日(横浜開港資料館ウェブサイトhttp://www.kaikou.city.yokohama.jp/journal/081/081_05.html (2024年11月15日閲覧))。
- (58) 持丸和久氏より2021年にご教示頂いた情報による。
- (59) 前田青柳の孫でお茶の水女子大学名誉教授の秋山光文氏より2023年にご教示頂いた情報による。
- (60) 加倉井秋を「木下春女史を悼む」(前掲註38)。
- (61) 体調を崩して以降の春の様子については『若葉』46巻10号(若葉社、1973年10月)所載の次の文献を参照した。
半谷綾子「木下先生を想う」33頁。
結城美津女「春先生のこと」34頁-35頁。
木下保子「わが姉「春」のこと」35頁。
- (62) 木下保子「わが姉「春」のこと」(前掲註61)。
- (63) 富安風生「木下春さんのこと」(前掲註12)。
- (64) 木下春「随筆歳時記 虹」(前掲註16)。

木下春 略年譜

【凡例】

・典拠に用いた文献および資料はおもに以下の方法で記載した。
書籍：〔著者/編者〕〔書名〕（出版社、出版年）
雑誌：〔雑誌名〕巻号（出版社、年月）または〔著者〕〔記事名〕〔雑誌名〕巻号（出版社、年月）
新聞：〔新聞名〕年月日朝/夕刊面または〔著者〕〔記事名〕〔新聞名〕年月日朝/夕刊面
展覧会出品目録等の印刷物：〔題名〕（出版年）
福島県立美術館が所蔵する、同館の調査による木下春の資料：「福島県立美術館 木下春調査資料」
なお、文献によっては章の題名などを記しており上記の限りではない。

年	事 項	典 拠
明治25年 1892年	1月19日、福島市置賜町で米穀、味噌、醤油等の商店を営む木下銀助、やすの長女として生まれる。 13人兄弟の第一子であった。	斎二郎編『話題の人々』（福島通信社、1923年）、木下春「あとがき」（『木下春句集』牧羊社、1968年）、渡邊彰範氏ご提供情報
明治41年 1908年	福島県立福島高等女学校卒業。卒業後は家業を手伝う。	斎二郎編『話題の人々』（福島通信社、1923年）、『読売新聞』1920年8月28日朝刊5面、「福島県立美術館 木下春調査資料」
大正元年 1912年	杏雲堂平塚病院（神奈川県平塚市）で療養する。療養中に、同じく入院をしていた富安風生（1885-1979）と出会う。 また、家族の談話では平塚滞在中に前田青郁と面識を持ったとされる。	『福島民報』1932年9月10日夕刊3面、加倉井秋を、清崎敏郎『富安風生』（俳句シリーズ 人と作品8、桜楓社、1966年）
大正6-8年 1917-1919年	この頃、短歌雑誌『アララギ』の会員になり和歌を投稿、『アララギ』10巻（10号-12号）、11巻（3号-5号）、12巻（4号、6号、11号）に掲載される。 また、上京する前に1か月ほど、本間国生のもとで絵を学ぶ。	『アララギ』10巻-12巻（アララギ発行所、1917年-1919年）、『福島民報』1932年9月10日夕刊3面
大正8年 1919年	6月、絵を学ぶために上京。東神奈川の前田青郁宅に寄寓し師事する。のちに、千駄ヶ谷849に住む。	『読売新聞』1920年8月28日朝刊5面、『朝日新聞』1920年8月28日朝刊5面、『美術公論』1巻5号（美術公論社、1920年9月）、前田青郁「木下春のこと」（『塔影』12巻3号（塔影社、1936年3月）、『前田青郁展』（京都国立近代美術館ほか、日本経済新聞社、2001年）
大正9年 1920年	8月28日、『朝日新聞』に「入選の喜び―昨夜自庭の木下春子女士―」の題で春の写真が掲載される。	『朝日新聞』1920年8月28日朝刊5面
大正9年 1920年	9月1日～9月29日、再興第7回日本美術院展覧会（上野公園・竹の台陳列館）に《秋草》を出品。同作は東神奈川の前田青郁宅の庭に取材したもの。	『朝日新聞』1920年8月28日朝刊5面、『日本美術院百年史』4巻（日本美術院、1994年）
大正10年 1921年	2月10日～23日、第7回日本美術院試作展覧会（上野公園・竹の台陳列館）に出品（作品名は不明）。	『日本美術院百年史』5巻（日本美術院、1995年）
大正10年 1921年	4月13日～28日、蒼空邦画会（白木屋五階）に《秋》を出品。	『朝日新聞』1921年4月24日朝刊6面
大正10年 1921年	6月、千駄ヶ谷から上目黒の駒澤練兵場そばへ引っ越し、同じく青郁門下の青木しづ子と同居を始める。	『読売新聞』1921年8月23日朝刊4面
大正10年 1921年	9月1日～28日、再興第8回日本美術院展覧会（上野公園・竹の台陳列館）に《桃》を出品。同作は新居裏手の桃の木を描いたもの。この時、院友に推薦される。	『日本美術院百年史』5巻（日本美術院、1995年）、『朝日新聞』1921年9月8日朝刊5面、『読売新聞』1921年8月23日朝刊4面
大正11年 1922年	8月末、再興第9回日本美術院展覧会へ《麦畑》を提出するも入選せず。	『朝日新聞』1922年8月30日朝刊5面
大正14年 1925年	2月1日～27日、第11回日本美術院試作展覧会（上野公園・竹の台陳列館）に《菊》を出品。	『日本美術院百年史』5巻（日本美術院、1995年）、『日本美術院第十一回試作展覧会図録』（大塚巧芸社、1925念）
大正15年 1926年	『日本美術年鑑 1927』（朝日新聞社、1926年）の「現代美術家録」に住所について「麹町平河町四ノ一〇宮川ヨシヲ」と記載あり。	『日本美術年鑑 1927』（朝日新聞社、1926年）
昭和2年 1927年	『日本美術年鑑 1928』（朝日新聞社、1927年）の「現代美術家録」に住所について「横浜市鶴見区東寺尾町二〇八―」と記載あり。この頃、師・前田青郁は横浜市の鶴見区生麦1444に住んでおり春も近隣に住んだと考えられる。	『日本美術年鑑 1928』（朝日新聞社、1927年）
昭和4年 1929年	9月3日～10月4日、再興第16回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に《秋苑》を出品。	『日本美術院百年史』6巻（日本美術院、1997年）
昭和5年 1930年	4月18日～20日、第8回福岡美術展（福島市福ビル）に作品を搬入する。同展は審査結果を問わず凡て出品との方針であったため、春の作品も出品されたと考えられる。	村山鎮雄『福島の近代美術』（三好企画、1992年）
昭和6年 1931年	9月3日～10月4日、再興第18回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に《砧》を出品。制作にあたっては福島に滞在し、瀬上町道田の人物をモデルに写生を行った。	『福島民報』1931年9月11日朝刊2面、『日本美術院百年史』6巻（日本美術院、1997年）
昭和6年 1931年	11月23日～25日、東京会（芝・東京美術倶楽部）に《紅梅》を出品。	『芸術』9巻21号（大日本芸術協会、1931年12月）
昭和6年 1931年	12月、『美術新論』6巻12号（美術新論社、1931年12月）の「美術家録」に住所について「横浜市鶴見区東寺尾町八七六」と記載あり。	『美術新論』6巻12号（美術新論社、1931年12月）
昭和7年 1932年	9月3日～10月4日、再興第19回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に《花寶》を出品。制作にあたっては福島市の笹谷村の人物をモデルとした。	『福島民報』1932年9月7日夕刊2面、『日本美術院百年史』6巻（日本美術院、1997年）
昭和7年 1932年	12月、『美術新論』7巻12号（美術新論社、1932年12月）の「美術家録」に住所について「横浜市鶴見区東寺尾町八七六」と記載あり。	『美術新論』7巻12号（美術新論社、1932年12月）
昭和8年 1933年	9月3日～10月4日、再興第20回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に《土用ばし》を出品。	『日本美術院百年史』6巻（日本美術院、1997年）
昭和8年 1933年	10月11日～17日、横浜美術第2回展（桜木町・興産館）の審査員を務める。	『塔影』9巻9号（塔影社、1933年11月）
昭和9年 1934年	9月3日～10月4日、再興第21回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に《機織》を出品。制作にあたっては、福島市の科亭・松葉館の友人をモデルとした。	吉村有子「福島の美術家たち④木下春」（『読売新聞』（地方版・福島）1996年4月14日朝刊、29面）、『日本美術院百年史』6巻（日本美術院、1997年）
昭和10年 1935年	昨年来より痔病で関東病院に入院、年が明けてから退院する。	『塔影』11巻3号（塔影社、1935年3月）
昭和10年 1935年	5月16日～21日、東潮会第1回展（伊勢佐木町・野澤屋）に《春の旅（スケッチ集）》を出品。同会は横浜在住の院展系作家による津波比会に神奈川在住の帝展系作家を加え再編したもの。	「東潮会第一回展覧会出品目録」『阿々士』（別巻3）（阿々士社、1935年7月）、『塔影』11巻7号（塔影社、1935年7月）
昭和10年 1935年	10月16日～22日、横浜美術協会昭和10年度展（桜木町・興産館）開催にともない、牛田雞村、片岡球子らとともに日本画部委員になる。	『塔影』11巻10号（塔影社、1935年10月）
昭和11年 1936年	5月5日～14日、宮城県および河北新報社の主催による第4回東北美術展覧会（宮城県商工奨励館）に《麗顔櫻》を出品。	『塔影』12巻6号（塔影社、1936年6月）、『日本美術年鑑 昭和十二年版』（美術研究所、1937年）、『第四回東北美術展覧会目録』（宮城県商工奨励館、1936年）
昭和11年 1936年	9月24日～29日、東潮会第2回展（横浜・野澤屋六階ホール）に《なす》《りんどう》《さくら》を出品。	「東潮会第二回展覧会出品目録」『塔影』12巻9号（塔影社、1936年9月）
昭和11年 1936年	秋頃、皇太子の居間を飾る軸の揮毫の下令を受ける。同下令は、帝室博物館鑑査官の秋山光夫の推荐によるもの。同作は1937年11月に完成。	『芸術』14巻21号（大日本芸術協会、1936年10月）、『婦人年鑑 昭和十三年版』（東京連合婦人会、1937年）
昭和11年 1936年	奈良・当麻寺に新築となった客殿の格天井に、日本美術院、帝国美術院の画家たちが絵を寄進することとなり、これに参加。《粟》を制作、寄進する。	『芸術』14巻20号（大日本芸術協会、1936年9月）、『昭和の天井絵 当麻寺中之坊客殿』（京都書院、1976年）
昭和11年 1936年	12月18日～20日、東京朝日新聞社会事業団主催の同情週間色紙即売会（銀座松屋）に色紙を出品。	『朝日新聞』1936年12月18日夕刊3面
昭和12年 1937年	4月15日～20日、第2回院友展（銀座・松坂屋）に《紅梅》を出品。	『芸術』15巻9号（大日本芸術協会、1937年4月）
昭和12年 1937年	9月2日～10月3日、再興第24回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に《晩秋》を出品。	『日本美術院百年史』7巻（日本美術院、1998年）
昭和13年 1938年	3月、『朝日新聞』1938年3月7日の朝刊10面掲載の土筆の挿絵を手掛ける。	『朝日新聞』1938年3月7日朝刊10面

年	事 項	典 拠
昭和13年 1938年	9月3日～10月4日、再興第25回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に〈こやすみ〉を出品。	『日本美術院百年史』7巻（日本美術院、1998年）
昭和13年 1938年	鶴見の住まいが国道建設の立ち退き対象となりそうだったため、青部より早く北鎌倉（神奈川県大船町山ノ内白山神社下）へ引越す。師・前田青部は翌1939年、神奈川県大船町山ノ内487に竣工となった自邸へ移り住む。	『帝国新書画名鑑 昭和十三年度』（2版）（最高美術社、1938年）、木下春「春それぞれ」『若草』25巻3号（若葉社、1952年）、『前田青部展』（京都国立近代美術館ほか、日本経済新聞社、2001年）
昭和14年 1939年	9月2日～10月3日、再興第26回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に〈芥子の朝〉を出品。	『日本美術院百年史』7巻（日本美術院、1998年）
昭和14年 1939年	10月1日～6日、小島一谿、木下春両氏新作画展（名古屋・松坂屋）に〈芍薬〉〈山菖蒲〉〈白椿〉〈萩〉など花を描いた横物の作品約20点を出品。	『塔影』15巻10号（塔影社、1939年10月）、『塔影』15巻12号（塔影社、1939年12月）
昭和14年 1939年	11月13日～15日、根本彰徳堂二十五週年展（日本橋・東美倶楽部）に〈早春〉を出品。	『塔影』16巻1号（塔影社、1940年1月）
昭和15年 1940年	1月より、俳人・富安風生に師事。	『現代俳句五十人集』第1輯（白鷺書房、1947年）
昭和15年 1940年	春、出版社の龍星閣にて沢田伊四郎より建築家で俳人の加倉井秋を（昭夫）を紹介される。	加倉井秋を「木下春女史を悼む」『若葉』46巻10号（若葉社、1973年）
昭和15年 1940年	春から初夏にかけて朝鮮半島を旅行。間組重役で朝鮮支店にいた楠目省介（号・橙黄子、日本画愛好・俳人）の案内もあった。7月9日から13日まで、朝鮮のスケッチが『福島民報』朝刊1面に掲載される。	『詩と美術』2巻8号（詩と美術社、1940年9月）、富安風生「序」（『木下春句集』牧羊社、1968年）、『福島民報』1940年7月9日～13日（いずれも朝刊1面）
昭和15年 1940年	9月1日～18日、再興第27回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に〈春愁〉を出品。	『日本美術院百年史』7巻（日本美術院、1998年）
昭和15年 1940年	『昭和十五年 婦人年鑑』（東京連合婦人会、1940年）の『婦人録』に住所について「神奈川県大船町山ノ内九四七」と記載あり。	『昭和十五年 婦人年鑑』（東京連合婦人会、1940年）
昭和16年 1941年	9月1日～20日、再興第28回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に〈巴〉を出品。無鑑査に選ばれる。また、1942年1月、美術と趣味社より昭和十六年度賞賛を受賞した。	『美術新報』3号（日本美術新報社、1941年9月）、『日本美術院百年史』7巻（日本美術院、1998年）、『美術と趣味』6巻9号（美術と趣味社、1941年9月）、『美術と趣味』7巻1号（美術と趣味社、1942年1月）
昭和16年 1941年	11月26日～28日、橙黄会第一回展（銀座・資生堂）に〈温室の花〉と朝鮮連作を出品。同会は、間組副社長で日本画愛好家であった楠目省介（号・橙黄子）を偲ぶために栗津静美堂が世話役となって結成されたもの。	『国画』1巻3号（塔影社、1941年11月）、『美術新報』9号（日本美術新報社、1941年11月）、『美術と趣味』6巻12号（美術と趣味社、1941年12月）
昭和16年 1941年	この頃、鎌倉・東慶寺の山内の茶室構えの家に住む。	木下春「入梅のある日」『若葉』170号（若葉社、1942年）、木下春「春それぞれ」『若葉』25巻3号（若葉社、1952年）
昭和17年 1942年	4月、京都を訪れる。岸風三樓宅に泊まり、4月20日に修学院、21日に桂離宮などを案内してもらう。	岸風三樓「岸風三樓集（自註現代俳句シリーズ・I期；20）」（俳人協会、1979年）
昭和17年 1942年	6月・7月、青樹会（大阪：朝日ビル藝術部画廊（6月1日～4日）、東京：上野松坂屋（7月1日～5日）に〈壺の花〉を出品。同展は美術と趣味社主催で、同社が新人奨励のために贈る蒼穹賞受賞者たちの作品を集めた展覧会。	『美術と趣味』7巻8号（美術と趣味社、1942年8月）
昭和17年 1942年	9月1日～20日、再興第29回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に〈覺山尼〉を出品。無鑑査に選ばれる。	『日本美術院百年史』7巻（日本美術院、1998年）
昭和17年 1942年	12月26日～28日、橙黄会第二回展（銀座・資生堂ギャラリー）に〈草紅葉〉を出品。	『国画』2巻12号（塔影社、1942年12月）、『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九～一九九四』（資生堂、1995年）
昭和17年 1942年	高浜虚子の句集『朝鮮』（再峰会、1942年）の挿画を手掛ける。	『俳句年鑑 昭和19年』（桃蹊書房、1944年）
昭和18年 1943年	9月1日～20日、再興第30回日本美術院展覧会（上野公園・東京府美術館）に〈もちかゆの日（枕の草紙）〉を出品。無鑑査に選ばれる。	『日本美術院百年史』7巻（日本美術院、1998年）
昭和18年 1943年	12月1日～3日、橙黄会第三回展（銀座・資生堂ギャラリー）に〈雪葉〉を出品。	『福島県立美術館 木下春調査資料』、『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九～一九九四』（資生堂、1995年）
昭和19年 1944年	4月28日、東慶寺にて鎌倉俳句会が催され、高浜虚子も参加する。	『ホトギス』48巻7号（ホトギス社、1945年4月）
昭和19年 1944年	中村汀女より依頼をうけ、『汀女句集』の装幀を手掛ける。	中村汀女『汀女句集』（甲鳥書林、1944年）
昭和20年 1945年	2月18日、住まいにて高浜虚子、星野立子、加倉井秋を、小倉遊亀、結城美津女、京極杞陽らと句会。	結城美津女『毛糸玉 句集』若葉社、1983年
昭和20年 1945年	3月8日、小山富士夫、久米正雄、川端康成、吉野秀雄、前田青部、小倉遊亀、島木健作、永井龍男らと北鎌倉の岡本孝平邸にて平治物語絵巻残闕、乾山の立葵などの美術品を鑑賞。	『吉野秀雄全集』第2巻（筑摩書房、1969年）
昭和21年 1946年	『ホトギス』49巻4号に掲載の「玉藻」2月28日付け消息欄に、春が福島に帰郷していることが報じられる。『ホトギス』や同誌の「玉藻」欄には木下春の名がしばしば見られ、鎌倉の句会「玉藻」で活躍していたことが確認できる。	『ホトギス』49巻4号（ホトギス社、1946年4月）。ほかに『ホトギス』50巻1号、50巻4号など。
昭和21年 1946年	9月1日～17日、再興第31回日本美術院展覧会（東京都美術館）に、中村汀女に取材した〈静思〉を出品。	『自由美術 日本画専門誌』1巻6号（自由美術社、1946年11月）、『若葉』20巻1号（若葉社、1947年1月）
昭和21年 1946年	12月4日、東慶寺にてホトギス六百号記念俳句会が催される。春も準備を行い、高浜虚子、星野立子、高野素十、東慶寺住職井上禅定師、中村七三郎、久米正雄、古屋信子らが集う。	『ホトギス』50巻7号（ホトギス社、1947年7月）
昭和22年 1947年	3月25日～4月10日、第2回日本美術院小品展（日本橋・三越）に〈静物〉を出品。	『日本美術院百年史』8巻（日本美術院、1999年）
昭和22年 1947年	9月1日～17日、再興第32回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈天秀尼〉を出品。無鑑査に選ばれる。	『日本美術院百年史』8巻（日本美術院、1999年）、『読売新聞』1947年9月4日朝刊2面
昭和22年 1947年	11月1日～8日、新梢会第1回日本画展（銀座・松坂屋）に出品。同展は安田靉彦、前田青部、小林古徑の門下生による展覧。	『市井展の全貌—東京における百貨店・画商の日本画展覧（戦後編）—』（八木書店、2015年）
昭和22年 1947年	この頃の住所は鎌倉市二階堂804村山方。	『現代俳句五十人集』第1輯（白鷺書房、1947年）
昭和23年 1948年	俳誌『若葉』が同人制を実施し、春も同人となる。	『若葉年刊句集（II）』（若葉社、1968年）
昭和23年 1948年	5月10日～15日、新梢会第2回日本画展（銀座・松坂屋）に〈静寂〉を出品。	『自由美術 日本画専門誌』3巻10号（自由美術社、1948年10月）、『市井展の全貌—東京における百貨店・画商の日本画展覧（戦後編）—』（八木書店、2015年）
昭和23年 1948年	9月13日～18日、文化人趣味展（銀座・松坂屋）に作品を出品。	『書壇』22巻11号（書壇院、1948年11月）
昭和24年 1949年	5月10日～15日、新梢会第3回日本画展（銀座・松坂屋）に出品。	『市井展の全貌—東京における百貨店・画商の日本画展覧（戦後編）—』（八木書店、2015年）
昭和24年 1949年	9月1日～19日、再興第34回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈婦女〉を出品。モデルは俳句仲間の女性。	『はまなす』5巻1号（はまなす発行所、1950年1月）、『日本美術院百年史』8巻（日本美術院、1999年）
昭和25年 1950年	4月18日～30日、第5回日本美術院小品展（日本橋・三越）に〈芥子〉を出品。	『日本美術院百年史』8巻（日本美術院、1999年）
昭和25年 1950年	9月1日～19日、再興第35回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈故郷の春〉を出品。同作は、福島疎開中、近所となる市内下野寺に住む三姉妹をモデルに作成した下絵をもとにしたもの。	『福島民報』1998年4月27日朝刊27面、『日本美術院百年史』8巻（日本美術院、1999年）
昭和25年 1950年	大橋越央子（大橋八郎）『句集 野梅』の装幀を手掛ける。	大橋越央子『句集 野梅』（コロナ社、1950年）
昭和25年 1950年	鎌倉に住んでいた小説家の久米正雄邸の二階で制作をする。	上村古島『壺中の殿堂』（近藤書店、1958年）
昭和25年 1950年	12月頃、鎌倉・長谷一丁目の別荘に疎開していた吉屋信子が東京へ戻るのを機に、吉屋信子の別荘に仮寓する。	『若葉』24巻4号（若葉社、1951年）、吉川文夫『江ノ電賛歌』（大正出版、1985年）、『社会教育施設 鎌倉市吉屋信子記念館』パンフレット（鎌倉市教育委員会、2015年）

年	事 項	典 拠
昭和26年 1951年	9月1日～19日、再興第36回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈かげいれ〉を出品。	『日本美術院百年史』8巻（日本美術院、1999年）
昭和26年 1951年	11月11日、群馬県・四万温泉に建立された富安風生の句碑の除幕式に参加。	『中之条町誌 第3巻』（中之条町、1978年）
昭和26年 1951年	福島市庁舎新築を記念し、1950年院展出品作〈故郷の春〉を市に寄贈する。	『福島市史資料叢書 第49輯（新聞資料集成 昭和の福島6）』（福島市史編纂委員会編、1986年）
昭和27年 1952年	2月、宮城県白石市にある俳人の鈴木綾園邸にて俳人の上村占魚と遭遇、大いに語り合う。	上村古魚『壺中の殿堂』（近藤書店、1958年）
昭和27年 1952年	9月1日～19日、再興第37回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈芍薬〉を出品。	『日本美術院百年史』8巻（日本美術院、1999年）
昭和27年 1952年	所弘『雨月物語』（上田秋成原作、同和春秋社、1952年9月発行）の表紙と挿絵を手掛ける。	所弘『雨月物語』（上田秋成原作、同和春秋社、1952年）
昭和28年 1953年	6月1日、春和会（新橋演舞場）にて吾妻流家元・吾妻徳穂による木下春作詞・荻江すえ作曲『天の川』の公演が行われる。作曲を手掛けた荻江すえは前田青邨夫人。	『日本舞踊年鑑 1973』（日本舞踊協会、1973年）
昭和28年 1953年	9月1日～19日、再興第38回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈十六の井〉を出品。	『日本美術院百年史』8巻（日本美術院、1999年）
昭和29年 1954年	9月21日、慶應義塾大病院に入院中の立憲義正会総裁・田中澤二を見舞う。	伊藤たか『病院日記』（田中澤二先生御門下同人会、1955年）
昭和30年 1955年	菅壽子が設立した紅梅学園の増築資金のため、頒布用の年賀はがきの原画を制作し寄付する。同学園は女性の知的障がい者のための施設。	不二昌男『白い青春 精薄処女たちの部屋』（虎書房、1956年）
昭和31年 1956年	この頃の住所は鎌倉市二階堂101の神津方。同地は地質学者の神津徹祐郎があり、夫亡きあとの妻・千代が住んでいた。千代は親世流の太鼓を修めた人物。	『現代日本画家辞典』（日本美術新報社、1956年）、「会員氏名録 昭和二十八・二十九年用」（学士会、1953年）、高橋正幸『鉱物学者 神津徹祐先生』『信濃教育』1003号（信濃教育会、1970年6月）
昭和32年 1957年	5月3日～8日、前田青邨塾第一回恵下会日本画展（銀座・松屋）に〈小菊〉を出品。	『前田青邨塾第一回恵下会日本画展 出品目録』（1957年）、「萌春」44号（日本美術新報社、1957年5月）
昭和33年 1958年	4月18日～23日、第2回恵下会日本画展（銀座・松屋）に〈緑木瓜〉を出品。	『第二回恵下会日本画展目録』（1958年）、「萌春」55号（日本美術新報社、1958年5月）
昭和33年 1958年	9月1日～20日、再興第43回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈甲子温泉の秋〉を出品。	『日本美術院百年史』9巻（日本美術院、1998年）
昭和34年 1959年	雑誌『郵政』の連載「手紙と人生」に「東慶寺」の絵と文を寄せる。	『手紙と人生』（46）『郵政』11巻3号（日本郵政公社広報部門広報部、1959年3月）
昭和34年 1959年	5月15日～20日、第3回恵下会日本画展（銀座・松屋）に〈たにまの秋〉を出品。	『福島県立美術館 木下春調査資料』、「萌春」68号（日本美術新報社、1959年6月）
昭和34年 1959年	9月1日～20日、再興第40回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈湯滝〉を出品。無鑑査に選ばれる。	『日本美術院百年史』9巻（日本美術院、1998年）
昭和35年 1960年	5月6日～11日、第4回恵下会日本画展（銀座・松屋）に〈静物〉を出品。	『第四回恵下会日本画展』（1960年）、「萌春」80号（日本美術新報社、1960年6月）
昭和35年 1960年	9月1日～20日、再興第45回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈絨々の暮色〉を出品。	『日本美術院百年史』9巻（日本美術院、1998年）
昭和35年 1960年	この頃の住所は鎌倉市大町1174。また『現代美術家名鑑 新古書画価格付』（美術倶楽部出版部、1960年）に「無鑑査六」「脱友」との記載あり。	『現代美術家名鑑 新古書画価格付』（美術倶楽部出版部、1960年）
昭和36年 1961年	1月17日～22日、女流日本画展（上野・松坂屋）に〈秋果〉を出品。	『福島県立美術館 木下春調査資料』、「萌春」88号（日本美術新報社、1961年2月）
昭和36年 1961年	5月26日～31日、第5回恵下会日本画展（銀座・松屋）に〈秋〉を出品。	『福島県立美術館 木下春調査資料』、「萌春」92号（日本美術新報社、1961年6月）
昭和36年 1961年	9月1日～20日、再興第46回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈海女〉を出品。	『日本美術院百年史』9巻（日本美術院、1998年）
昭和37年 1962年	1月30日～2月4日、2回女流日本画家展（上野・松坂屋）に〈朴落葉〉を出品。	『日本美術年鑑 昭和三十八年』（東京国立文化財研究所、1964年）、「萌春」99号（日本美術新報社、1962年2月）
昭和37年 1962年	5月8日～13日、第6回恵下会日本画展に〈八重櫓〉（銀座・松坂屋）を出品。	『福島県立美術館 木下春調査資料』、「萌春」102号（日本美術新報社、1962年6月）
昭和37年 1962年	9月1日～20日、再興第47回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈花圃〉を出品。	『日本美術院百年史』10巻（日本美術院、1998年）
昭和37年 1962年	第1回福島県芸術祭秀作美術展（11月6日～11日、中合ホール）の委嘱出品者となる。	『福島県年鑑 1964年版』（福島民友新聞社、1963年）
昭和37年 1962年	9月4日、山梨県の西湖を訪れ、滞在中の富安風生に絵の手ほどきをする。富安は70歳を過ぎてから日本画を学んだ。	加倉井秋を、清崎敏郎『富安風生』（俳句シリーズ 人と作品8）桜楓社、1966年）
昭和38年 1963年	2月26日～3月3日、女流日本画家展（上野・松坂屋）に出品。	『日本美術年鑑 昭和三十九年』（東京国立文化財研究所、1965年）
昭和38年 1963年	5月6日、中村汀女主宰の俳誌『風花』十五周年記念祝賀大会（東京・八芳園）に列席する。	『風花』152号（風花書房、1963年5月）
昭和38年 1963年	9月1日～20日、再興第48回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈窓〉を出品。	『日本美術院百年史』10巻（日本美術院、1998年）
昭和38年 1963年	1月25日、千葉県東条村草庵を訪れ、静養中の富安風生に絵の手ほどきをする。	加倉井秋を、清崎敏郎『富安風生』（俳句シリーズ 人と作品8）桜楓社、1966年）
昭和38年 1963年	9月4日、山中湖畔を訪れ、避暑のため滞在中の富安風生に絵の手ほどきをする。	加倉井秋を、清崎敏郎『富安風生』（俳句シリーズ 人と作品8）桜楓社、1966年）
昭和39年 1964年	5月21日、避暑に山名湖畔に滞在した富安風生に絵の手ほどきをする。	加倉井秋を、清崎敏郎『富安風生』（俳句シリーズ 人と作品8）桜楓社、1966年）
昭和39年 1964年	6月11日、富安風生に絵の手ほどきをする。	加倉井秋を、清崎敏郎『富安風生』（俳句シリーズ 人と作品8）桜楓社、1966年）
昭和39年 1964年	11月5日～6日、富安風生に絵の手ほどきをする。	加倉井秋を、清崎敏郎『富安風生』（俳句シリーズ 人と作品8）桜楓社、1966年）
昭和41年 1966年	中村汀女主宰の俳句雑誌『風花』188号にカットを揮毫する。	『風花』188号（風花書房、1966年8月）
昭和41年 1966年	9月1日～20日、再興第51回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈十一月尽〉を出品。無鑑査に選ばれる。	『日本美術院百年史』10巻（日本美術院、1998年）
昭和43年 1968年	9月1日～20日、再興第53回日本美術院展覧会（東京都美術館）に〈梅の谷戸〉を出品。	『日本美術院百年史』10巻（日本美術院、1998年）
昭和43年 1968年	昭和15年以降の俳句を収めた『木下春句集』（牧羊社、1968年）を刊行。	加倉井秋を「木下春女史を悼む」『若葉』46巻10号（若葉社、1973年）
昭和44年 1969年	発病。まもなく福島に住む母、木下正治・保子夫妻の元に身を寄せる。木下保子は俳誌『若葉』の同人でもあった。	木下保子「わが姉「春」のこと」『若葉』46巻10号（若葉社、1973年）
昭和48年 1973年	6月27日、逝去。	『はまなす』28巻8号（通号332）（はまなす発行所、1973年8月）



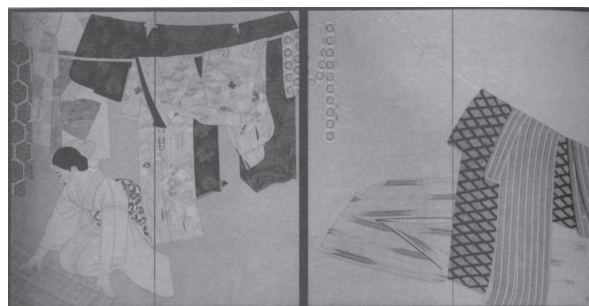
挿図1 木下春《秋草》1920年



挿図2 木下春《桃》1921年



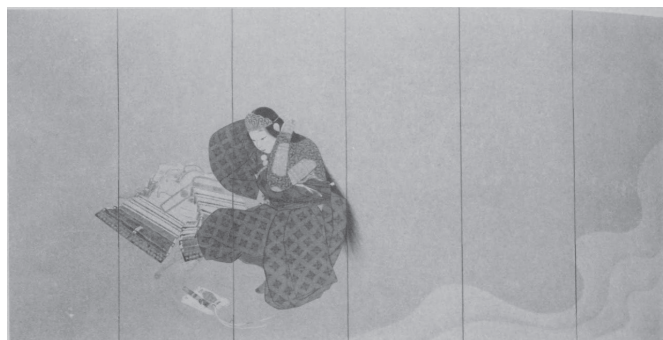
挿図3 木下春《秋苑》1929年



挿図4 木下春《土用ぼし》1933年



挿図5 木下春《春愁》1940年



挿図6 木下春《巴》1941年



挿図7
木下春《桃》
落款拡大図



挿図8 木下春《栗》・落款拡大図 1936年



挿図9 木下春《芍薬》・落款拡大図 1939年

